

屋山城ハンドブック



屋山の航空写真

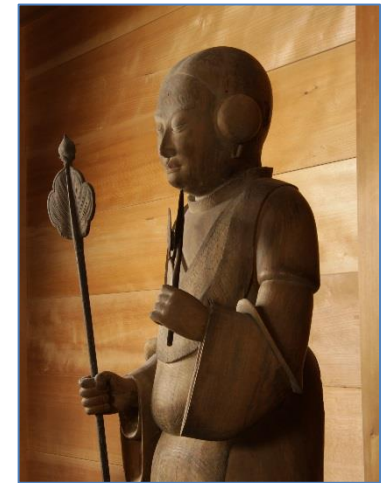
屋山は豊後高田市都甲地区にある山で、屋根のような形をしているので「屋山」と呼ばれています。見る方向によって形が変化し、「八面山」^{はちめんざん}とも呼ばれています。

今からおよそ1300年前、八幡神の化身とされる「仁聞菩薩」^{にんもんぼさつ}によって国東半島中に28もの寺院がつけられました。その寺院の集まりを六郷満山といいます。屋山には長安寺が開かれ、中世においては六郷満山の中心として活躍しました。平安時代後期に彫られた太郎天像は、「童子」^{どうじ}と呼ばれる子どもの姿をしており、像の内部に書かれた多くの記録から、不動明王の化身だということが分かっています。^{ふどうみょうおう}

屋山の山頂には、屋山城跡があります。今からおよそ400年前に吉弘統幸^{よしひろむねゆき}という武将が、15才の若さで城を今の形につくりあげた事が古文書の記録から分かっています。^{こもんじょ}



長安寺の境内



木造太郎天像

屋山城主・吉弘統幸

屋山城主・吉弘統幸は、義に厚く、とても勇敢な武将であったと言われています。統幸が15才の時、父・鎮信を日向・耳川の戦い（現在の宮崎県川南町）で失った後、代々大友家の重臣の一族であった吉弘家をまとめあげました。

当時の国東半島の武士達は、河内の鞍懸城で起こった田原親貫の乱に苦しめられていました。統幸は敵の攻撃に耐えられるよう屋山城を改築し、乱の平定の戦でも活躍しました。

1600年、統幸は西軍についた主君・大友義統に従って、黒田官兵衛の大軍と、別府・石垣原で決戦します。統幸は義を貫きとおし、最期まで戦い抜きました。統幸の死に様を見て、敵も味方も統幸の勇敢さを称えたと言われています。



吉弘統幸の肖像画



金宗院の統幸の墓

屋山城を守る仕掛け

屋山城には、敵が簡単には侵入できないように、様々な仕掛けがつくられています。屋山城は険しい山の頂の尾根に沿って郭をつなげる「連郭式山城」と呼ばれる種類の城です。

城の入口付近には、長い塹堀がつくられて、道が細くなっており、敵は一行に並ばないと城を登ることができません。長い列になった敵を、上から大勢で攻撃したり、横から弓矢で狙い撃ちすれば、少ない人数でも敵を倒すことができる仕掛けです。城の入口は虎が口を開けたような場所でしたので「虎口」と呼ばれます。

城の中心を仕切る「堀切」は、城に侵入して勢いづいた敵を、堀の中に一度くぐらせて疲れさせたり、再度登る時に上から攻撃したりするための仕掛けです。



塹堀の間を歩く様子



堀切を渡る様子

屋山城からの眺望

戦国時代の山城は、敵が近づいていた時、すぐに分かるように、見晴らしの良い高台につくられました。屋山城は、^{どくりつほう}独立峰で周囲に視界を妨げるものがなく、^{さまた}周辺との高低差も大分県の山城では屈指であるため、非常に遠くまで見渡すことができます。

長岩屋の天念寺や、真玉の無動寺の岩峰も全体がよく見えます。下から見ると大きい、^{なめし}並石ダムや^{いのむれさん}猪群山も屋山城からだ、小さく見えます。天気がよければ、海まで見えるため、明治時代には大きな^{いしどうろう}石燈籠がつくられています。



屋山城の縄張図

